

思ってますよね。ここに通っている方々にとって、先生がここにいらっしゃることで安心感が得られたり、自分が肯定されていることを実感できる場になっているのでしょうかね。

安彦：だから、人から見てもらったり経験を



えることはありません。多くの道具を用意するだけです。

——確かに、ここで先生自身も創作活動をされているけど、参加者のみなさんに教えることはしていませんね。

安彦：ええ。どうしても本人が必要だと望んだときだけアドバイスしています。これはセラピーではありません。社会復帰が目的ではないので、型にはめるようなことはしません。自分自身を認め、向き合い、治癒力を高めるために創作活動が必要だと考えているんです。いまは3ヶ所の病院で〈造形教室〉をやっていますが、それは患者さんを癒すことだけが目的ではありません。その病院で働く医療者にとても1つの癒しになるんじゃないかなっていうこと、病棟にステンドグラスを入れたり、廊下に絵を飾つたりしてしています。僕は病院そのものを癒したい。制度や方針の枠に少しあるなしさに関わらず、だれにも共通する

思いですよね。ここに通っている方々にとって、先生がここにいらっしゃることで安心

感が得られたり、自分が肯定されていること

を実感できる場になっているのでしょうかね。

平川病院〈造形教室〉

〈造形教室〉主宰 — 安彦講平

〈造形教室〉参加者 — 本木 健

江中裕子

長谷川 亮介

あびここうへい
もときたけし

えなか ゆうこ

はせがわ りょうすけ

平川病院 院長 — 平川淳一 | ひらかわ じゅんいち

東京都八王子市

〈造形教室〉主宰
安彦講平 あびここうへい



「〈造形教室〉ができるまで」

——なぜ芸術活動に関わるようになつたのですか。

安彦：僕は、昭和11年生まれで80歳になります。子どもの頃から物を作つたり絵を描いたり、文章を書いたりするのが自分らしくいられる感じのどちらかというと内向的な性格でした。生きるということは、平穏無事なだけではいられません。人間の生命とは、いろんな問題に突き当たりながら、きわどい状況切り抜けることで鍛錬され、世

重ねることは大事ですよ。そのプロセスや関係のなかで、表現はどんどん奥行きや幅を広げ、変化交換していく。時間の経過のなかで見方や受取り方が変わつてることも随分あります。きしみや行き違いも生じます。芸術は、有形のものを通した、際限のない有形無形の活動の連続なんです。

〈造形教室〉 参加者
本木 健 もときたけし



「作品制作について」

——教室に通う方々は、家庭内の問題などによる後天性の障がいを持つ方が多いですか？

安彦：そういう方が多いですね。しかし、この障がいは1つの病理から生じるのではなく、関係性の病理です。機械的故障のように、ネジに絵を描くための専用の部屋を作ってくれました。それが〈造形教室〉の始まりです。その後、八王子に創設された全開放制の丘の上病院でも同じように始めたのですが、25年ほど経った頃、院長が亡くなられて。ここで教室はもうおしまいかなって思っていたんですね。が、みんなが「続けてほしい」と言ってくれたんですよ。それであちこちに問い合わせて、

とか「癒される」とか、そういう受け身の言葉じゃなく、能動的に自らの問題と向き合い、身体を治していかないといけないんですね。僕の言う「癒し」っていうのは、「癒されたい」とか「癒される」とか、そういう受け身の言葉じゃなく、能動的に自らの問題と向き合い、支えあかしていくという意味です。だから、〈造形教室〉で僕は、美術学校のように技術を教

「癒し」とは

——〈造形教室〉に通い始めて、もう長いんですか？

本木・平川病院での〈造形教室〉は1995年からだから、もう21年目です。丘の上病院の頃から数えると30年になります。先生と出会ってから、ずっと描き続けていますね。

——それまでは絵を描いていなかつたんですか？

本木：はい。中学校の授業で描いたくらいでいるので、画風がガラッと変わりました。

教室を受け入れてくれる病院を探していたときに会ったのが平川病院でした。1992年以来、毎年、展覧会も開催しています。今年第23回目を迎えます。制作をしていると、ふと自分のなかのもう1人の自分に会う瞬間が訪れることがあります。そういう、自分に内在しているものをいかに表現するか。アートっていうのは、単に教育や治療の手段や道具じゃないんです。僕自身も、みんなの表現から学ぶことが多いし、力づけられる。だから50年も続けてこられたんです。

——創作活動って、最終的には内面との対話に行き着くんだろうと思います。本木さんは、どういう症状で入院されていましたか？

本木：強迫症状・強迫確認です。よく家を出た後に水道の栓を閉めたかどうかわからなくなることってあるでしょう？ そういうふうに、水道の栓やドアのノブ、扉の開け閉めが不安で、何度も何度も確認するんです。それでなかなか次へ進まないというのです。そんな自分をわかっていても、その場を離れられない。小学生の頃から症状は出ているんですけど、ごまかし続けて、初めて医者に行ったのが24歳でした。もう働いていたし、ニッチもサッセもいかなくなつて「ダメだな、もう医



江中裕子　えなか　ゆうこ
〈造形教室〉参加者



本木 律 /『座る男』

なることってあるでしょう？ そういうふうに、自分の頑からぬ自分をわかっていても、その場を離れられない。小学生の頃から症状は出ているんですけど、ごまかし続けて、初めて医者に行ったのが24歳でした。もう働いていたし、ニッチもサッセもいかなくなつて「ダメだな、もう医

者行く」って宣言して。その後入院して、昼間は働き、夜病院に帰るという生活を続けていました。

■能動的に働きかけること

——その後、安彦先生と出会うのですね。安彦先生が「これは癒しなんだ。癒しは他人から与えられるものではなくて、自分のなかで見つけていくんだ。自分と向き合い、自らの治癒力を自分の力で高めていくことなんだ」とおっしゃっていました。

本木：まさにそうですね。自分から能動的に働きかけることで再生できるんですよ。父は過干渉気味で、とても厳しかったので、家庭にいると緊張するんですよ。ここだとのびのびで、安心できるし、気にかけてくれる人もいるし、自分の絵を見て感想を言つてくれる人もいる。1人で描くんじゃない。1人で描くのは、キツいと思います。

——そうですね。描くって、もちろん楽しいことでもあるけど、ある意味苦しい。こういうふうにしたいのに、なかなか近づかないとかありますよね。最初は趣味に近いものだったと思うんですが、展覧会もされるようになつたりして、いまはもう画業が中心ですよね。

本木：生活の中心ですね。絵を描くこともそれ

うですが、ここに来るっていう目的も、生活の中心です。通院している人のなかには、そういう居場所や目的がない人もいるでしょう。それに比べたら、なにかしらして過ごしていられる。それは素晴らしいことですよ。もちろん、絵っていうのはあくまで心の支えであつて、お金にはなりません。そもそも先生から作品は売るなどと言われているし。

——売るなど？

本木：ええ。売るために描くのではない。自分と向き合うために描くんだと言われてきました。そんな安彦先生が自分に染みついているんでしょうね。僕は、安彦先生がいろいろ企画をしたり、展示したりするのが大好きなんですね。僕はあまり人と交わるのが得意な方じゃないかも知れないけど、この経験を通して、僕は、安彦先生がいることで話す人が増えてきました。

——他人と対話する機会が増えているんですね。本木さんは、自分で自分を俯瞰して見ているような印象を受けました。

本木：ええ。あくまでも自分が経験してきたことしか話せないから、それを話すだけですけどね。

——本木さんは、自分で自分に聞くんです。それに「いつも自分で自分に聞くんです。それが1つの作

品のように見える。そう考えたら、終わらないですね。

本木：振り返つてみないと、わからないんでしょうね。年を追うごとに「自分は頑張って生きてきたんだな」と思えるようになります。本木：人生を俯瞰してみるとそれが1つの作品のように見える。そう考えたら、終わらないですね。

——どこかで1つの作品が完成したということにしても、その先もテーマは繋がっています。大丈夫だって答えが返つてくれれば、描くことです。これは、自分にとってすごく重要なことです。

——描くことは、自分自身と向き合うこと。そのプロセスを重視するのなら、作品をどの段階で完成とするか悩むということはありませんか？

本木：完成はないですね。終わる気もないし、終わっているのは、展覧会が近づいています。そんな安彦先生が自分に染みついているんでしょうね。僕は、安彦先生がいることで話す人が増えてきました。

——描くことは、自分自身と向き合うこと。そのプロセスを重視するのなら、作品をどの段階で完成とするか悩むということはありませんか？

——コレージュ作品を拝見しました。すごい感性ですね。

江中：ありがとうございます。子どもの頃は冈

エスカレートして、寝ずに食べずにずっと洗い続けていたら、そのうち栄養失調で体重も30kgを切りそなつて。それで、追いつめられて入院したのが、働き始めて15年目のときでした。

——江中さんはどんな症状をお持ちなんですか？

江中：幻聴から始まつたと思います。高校を卒業して事務員の職に就きました。その後山のなかにぼつんとなる事務所に異動になったんですけど、みんなが外回りに出で1人になつたときに、だれもいないはずなのに、ガサガサガサガサと人がいるような音が聞こえてきたり、遠くでだれかが叫んでるような気がしたりとか、そういう不思議なことがいっぱい起

■〈造形教室〉との出会い

——コレージュ作品を拝見しました。すごい感性ですね。

江中：ありがとうございます。子どもの頃は岡

エスカレートして、寝ずに食べずにずっと洗い続けていたら、そのうち栄養失調で体重も30kgを切りそなつて。それで、追いつめられて入院したのが、働き始めて15年目のときでした。

江中：そうなんですよ。私の病棟には黄色い扉があつて、それは誰も開けちゃいけない『開かずの扉』って呼ばれていました。ある日、そこがちょっとだけ開いて、その隙間から安彦先生が顔を出しました。それで、私の作品を見て、「今まで人にあげた作品を全部回収しない」と言つて言つて言つて教えてもらつたんです。

——入院中に独自に制作活動をしていて、安彦先生に出会つたんですか？

江中：そうなんですよ。私の病棟には黄色い扉があつて、それは誰も開けちゃいけない『開



〈造形教室〉参加者

長谷川 亮介 はせがわりょうすけ



〈造形教室〉に通いはじめたきっかけ

—— 教室にはいつから通われているんですか？

長谷川…15～16年前に身体と精神を病んで入院したんですが、その頃から通うようになりました。水彩画のようなことから始めて、僕は洋楽が大好きなので、だんだんミュージシャンを描くようになりました。絵を描くときは、下絵の輪郭線が消えるか消えないくらいの際までも、絵の具を塗り込んでいます。

—— リズム感があって、すごく面白い構図

—— 心臓の病気はたまたま？

長谷川…たまたまですが、長い間患っていたんですね。なんだか身体が重いし、些細な運動でも息が切れていたんですが、それは人より少し身体が弱いからだと思つていました。病氣に気がつかなかった間に無理を重ねてしまい、そのうち心臓だけではなく精神までも病み、幻聴が聞こえるようになっちゃつたんです。バイトしているときは「これだけ頑張っているから、今日はお母さん喜ぶよ」とか言つてくれて

—— 「『頭天使ロック』を描かれたときのエピソードを読ませていただいて、人を思いやるということについて改めて考えさせられました。人に想いを伝えるって、難しいことですよね。

長谷川…誠実であれば誠実であった分だけ誤解が生じると思うんです。あと僕はキリスト教が生じると思うんです。あと僕はキリスト

—— 他人も自分自身も救せないっていう人が多いと思います。いまの話を聞くと、本当にいろいろなことを考えさせられます。

長谷川…以前本で読んだのですが、人間って、男の人も女の人も、子どもも大人も、悲しいでいる人も喜んでいる人も、怒っている人も笑っている人も、どんな人もみんな、いまを100%頑張っているんですって。頑張るって、なにかをするとか作るとか、そういうことだけじゃないんです。頑張ってなんにもしないってこともあります。頑張ってだけたり、頑張って怒ったり、それでもみんな、どんな状況であれ頑張っているんです。それは僕の救いになりました。

ですね。入院のきっかけはどのようなことだったんですか？

長谷川…40歳くらいのときに、別の病院に強制入院させられたんですが、それがなんとも辛かつたんです。タコ部屋みたいなところで、トイレのすぐ隣だったから臭いし、ベッドもなくて、畳も焼けちゃって。とにかく環境が悪くて、外の光を浴びられるのは、朝と夕方のラジオ体操のときだけでした。当時はまだ、病棟が座敷牢みたいな時代だったんです。それで、僕は脱走したんです。手持ちのお金を全部10円玉に替えてもらって、泣きながら両親に電話して、退院させてもらいました。実はその3日後くらいに心臓疾患がみつかって別の病院に入院することになつたんです。あのとき脱走してなかつたら、僕は死んでたと思います。

いたんですけど、そのうち罵倒に変わってきて。「お前なんか生きている価値がない」とか、本当に辛くて、いろんな努力をしました。ヘッドホンをかぶってハードロックをガンガンかけて、自己啓発本を読みだりとか。そうして無理やり幻聴を我慢してきました。

—— 「『赦す』ということ」

—— 「頭天使ロック」を描かれたときのエピソードを読ませていただいて、人を思いやるということについて改めて考えさせられました。人に想いを伝えるって、難しいことですよ。

長谷川…誠実であれば誠実であった分だけ誤解が生じると思うんです。あと僕はキリスト教で大前提になつていて「赦す」っていう言葉がすごく好きなんです。相手を受け入れたり赦したりすること。だからがすごく怒っていても「辛いことがあるから怒つてるんだな」って、その人のことも自分のことも赦したい。それは簡単だけど大変な約束ですよね。愛とか献身とかって、僕には難しそうなからできないんですよ。だから、ただ「赦す」っていうことをしたいと思っています。

—— カッターナイフや引火性のオイルもおいてありますし、〈造形教室〉の活動がリスクになることはありませんか？

平川…ちゃんと管理してあればいいんですよ。が起きこってはいけないからと、昔は男女別病棟にしていましたが、そうすると男性は自慰行為をその辺にするし、女性はタンポンを投げつけたりする。そこでえで男女混合病棟にしたら、お互いが異性を意識するようになって、男性は身なりをきちんととするようになつたし、女性は口紅を引くようになつた。なんでも危険を排除すればいいというものではないんです。



平川病院 院長

平川淳一 ひらかわじゅんいち

—— 〈造形教室〉の在り方

にしました。そのほか理学療法や電気球療法を取り入れ、病棟以外にも特別養護老人ホームや保育園なども併設した、精神的にも身体的にも、人間全部を診ることができる病院だと自負しています。僕はもともと内科医で、精神科は嫌いでした。糸余曲折あって親父から病院を引き継ぐことになつたけど、精神科においてなにが正しいか、まだよくわかつていません。内科では、判別診断により病気を決定したうえで治療しますが、精神科はモヤっと診断をつけ、経過を見ながら治療をします。結局なんだかよくわからなかつた、ということもあり得る。精神科医は病気だけではなく、その人の人生を診るようなものなのですよ。

—— どうして〈造形教室〉を始めるに至りましたか？

平川…もともと教室を開催していた丘の上病院が閉院することになり、継続できる場を探して、安彦先生が訪ねてこられたんです。あくまで軒下を貸すような形でしたから、当時は今のようにアトリエもありませんでした。

—— そこから病院が徐々に支援したんですねか？

平川…いや、僕はなにもしていません。放つておいています。コンクリートの割れ目から、一つの間にか咲いていた花をそつとしておこうなどじでですね。僕がコントロールするよ

—— 最初に〈造形教室〉の作品をご覧になつた感想はいかがでしたか？

平川…最初は「汚くて暗い絵ばかり描くな」と思つたし、病棟に飾ることにも抵抗がありました。でも、病院経営の立て直して自分で自分が大変だった時期に、作品を見て泣けた

平川…平川病院はもとは精神科のみの単科病院でしたが、現在は歯科や内科、合併症への対応機能も備えた高機能病院です。たとえば、向精神薬の副作用の1つとして『口渴』といふ、唾液の分泌が減る症状があります。そうすると虫歯がやすくなってしまうんだけれど、歯科医が當時いるわけじゃないから、痛がる患者さんはとりあえず歯を抜いて対処していたんです。そうやって味噌歯の患者が増えていくのを見て、歯科を設置すること

—— 平川病院の特徴とは――

平川…平川病院はもとは精神科のみの単科病院でしたが、現在は歯科や内科、合併症への対応機能も備えた高機能病院です。たとえば、向精神薬の副作用の1つとして『口渴』といふ、唾液の分泌が減る症状があります。そうすると虫歯がやすくなってしまうんだけれど、歯科医が當時いるわけじゃないから、痛がる患者さんはとりあえず歯を抜いて対処していたんです。そうやって味噌歯の患者が増えていくのを見て、歯科を設置すること

—— 参加者にとっての〈造形教室〉や安彦先生の存在――

平川…平川病院は徐々に支援したんですねか？

平川…いや、僕はなにもしていません。放つておいています。コンクリートの割れ目から、